

称号及び氏名 博士(看護学) 笹谷 真由美

学位授与の日付 平成30年9月25日

論文名 特別養護老人ホームにおける看護実践能力尺度の開発

論文審査委員 主査 長畑 多代

副査 田嶋 長子

副査 細田 泰子

## 論文内容の要旨

**【目的】**本研究は、特別養護老人ホーム（以下、特養）、における看護実践能力尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することで尺度開発することを目的とする。

**【尺度原案の作成】**尺度の開発は以下のプロセスで進めた。

### 1. 予備研究1：特養における看護実践能力の概念分析

1)方法：Walker&Avantによる概念分析の方法に則って行った。国内文献13件、国外文献9件と、報告書等8件、辞書2冊、書籍5冊の37文献を分析対象とした。2)結果：属性として、〈入居者・家族との関係性を築く〉など8つの概念が導き出された。また先行要件は〈環境因子〉と〈個人因子〉、帰結は〈ケアの質の向上〉〈ケアの質の低下〉が明らかになった。

### 2. 予備研究2：特養における看護実践の特性の明確化

1)方法：関連学会の学術集会、学会誌、専門雑誌等において特養の看護実践に関する研究や、実践報告等を発表している看護師13名への個別面接調査の内容を質的帰納的に分析した。2)結果：特養における看護実践の特性は、〈入居者との関係性を構築する〉〈家族との関係性を構築する〉など7の大カテゴリーと51の小カテゴリー、137のカテゴリーが抽出された。

**3. 尺度原案の作成：**予備研究1で明らかになった特養の看護実践能力の概念分析で明らか

になった属性と、予備研究2で明らかになった特養における看護実践の特性のカテゴリー

の内容から、尺度項目を作成した。その結果、〈入居者との関係性を構築する〉〈家族との関係性を構築する〉〈その人らしい生活を支える〉〈高齢者に起こりやすいリスクを予測して

対応する)〈日常生活の延長線上にある自然な看取りを支援する)〈介護職をサポートする)〈多職種と効果的に連携する)の7の下位概念と51の項目とした。

### 【尺度の信頼性・妥当性の検討】

#### 1. 本研究1：特養における看護実践能力尺度の表面妥当性・内容妥当性の検討

1)方法：学会誌・専門雑誌等において特養における看護についての実践報告を行っている看護師を対象に自記式質問紙調査を行った。項目の表現が適切か、追加・削除項目があるかについて調査し、自由記載の内容を反映させて検討し項目の表現や重複、不足等を修正した。2)結果：32項目の文言を修正し、〈日常生活の延長線上にある看取りを実現する〉、〈介護職をサポートする〉では各1項目削除し、〈日常生活の延長線上にある看取りを実現する〉では1項目追加した結果、51項目から50項目となった。

#### 2. 本研究2：特養における看護実践能力尺度の内容妥当性指数を用いた検討

1)方法：学会誌・専門雑誌等において特養における看護についての実践報告を行っている看護師(ただし、本研究1の対象者は除く)および尺度開発に精通した老年看護学研究者を便宜的に抽出した者を対象に自記式質問紙調査を行った。内容妥当性指数(Item-Content Validity Index;以下、I-CVI)を算出し、I-CVI得点が0.80以上の項目を適切な内容妥当性があるとし、0.80未満の項目は削除した。2)結果：尺度原案の50項目のうち9項目は0.9、1項目が0.8でそれ以外は1.0であった。そのため、項目すべてをそのまま採用した。

#### 3. 本研究3：特養における看護実践能力尺度の信頼性・妥当性の検討

1)方法：全国の特養の看護師を対象に自記式質問紙調査を行い、項目分析、構成概念妥当性の検討、内的整合性の検討、基準関連妥当性の検討、安定性の検討を行った。2)結果：1回目の調査の回答は452名(回答率74.9%)であり、有効回答者数432名(有効回答率71.6%)を分析対象とした。再テストは316名(回答率73.1%)で、有効回答者数は300名(有効回答率69.4%)であった。項目分析の結果、10項目を削除し50項目を探索的因子分析の対象項目として行い、〈その人らしい生活を支える力〉〈多職種と連携する力〉〈変調に気付き対応する力〉〈望む看取りを支援する力〉の4因子34項目で構成する尺度を作成した。内的整合性は、Cronbach's  $\alpha$ 係数が尺度全体で0.958、各因子で0.868~0.946であった。基準関連妥当性は、CNCSSでは $\rho=0.383\sim0.631$ 、特養における看取りの看護実践能力尺度では $\rho=0.391\sim0.642$ 、学際的チームアプローチ実践評価尺度では $\rho=0.367\sim0.542$ といずれも有意な正の相関を示した。既知グループ法では、年代・職位・研修の有無について比較した結果、職位では看護管理職が、研修では研修ありの方が有意に点数は高かった。安定性は再テスト法を行い、1回目と2回目の合計得点の間で $\rho=0.791$ 、各因子では $\rho=0.510\sim0.801$ の有意な相関がみられた。

**倫理的配慮：**いずれの調査も大阪府立大学看護学研究倫理委員会にて承認を得て実施した。

**【考察】**本研究で開発した特養における看護実践能力尺度は、内的一貫性と安定性、基準関連妥当性と構成概念妥当性の結果から一定の信頼性、妥当性を備えた尺度であることを確認した。本尺度は尺度全体や下位尺度の点数をみることで、自己評価ツールとしての活用

や教育的介入の効果の検証として用いることが出来る。評価することは看護師自身が自己課題を明確にし、各施設における看護体制や役割について検討する資料になると考える。

キーワード：特別養護老人ホーム、看護師、看護実践能力、尺度開発

Keywords: intensive care homes for the elderly, nurses, nursing competence, scale development

## 学位論文審査結果の要旨

中重度の要介護者を対象とし、看取りを見据えたケアを提供する特養において、看護職が果たすべき役割は高度化かつ多様化している。常時介護や医療的ケアを必要とし、認知症を有する割合の高い入所者に対する専門的な看護実践が求められる一方で、特養に固有の看護実践能力を測定する方法はいまだ開発されていないことから、看取りや連携といった特養における看護実践の一側面だけにとどまらず、生活の場における看護実践全体としてとらえて測定する方法に焦点をあてた本研究は、独創性の高い学術的に重要な課題に取り組んでいると評価できる。

看護実践能力尺度の開発では、概念分析に基づいた熟練看護師 13 名への面接調査から豊富なデータを得ることができており、詳細な看護実践内容の質的帰納的分析により、看護実践能力を表す 7 つの下位概念と 51 項目から構成される尺度原案を作成した。原案の尺度項目についての表面妥当性および内容妥当性の検討を経て、全国の特養に勤務する看護師を対象とする自記式質問紙調査を実施し、有効回答の得られた 432 名を分析対象として項目分析および探索的因子分析を行った。その結果、特養における看護実践能力尺度は〈その人らしい生活を支える力〉〈多職種と連携する力〉〈いつもの状態に整える力〉〈望む看取りを支援する力〉の 4 因子 34 項目で構成され、内的一貫性と安定性による信頼性、構成概念妥当性および基準関連妥当性を備えた尺度であることが確認された。本尺度は、尺度開発の方法論に基づくプロセスを丁寧かつ慎重に進めて開発されており、特養における看護実践能力の評価が可能な測定用具であることが示された。

特養においては、他の看護領域と比較して看護職員の現任教育体制が十分とはいえず、離職率も高いことから実践知の蓄積と共有が難しい現状がある。そのため、本尺度を用いて自己評価することで、個々の看護職員の課題の明確化に資するとともに、教育ニーズを把握するためのツールとしても活用することができ、実情に即した教育プログラムの開発に寄与するなど、活用可能性が大いに期待できる。

以上のことから、本研究は看護学の発展に寄与する博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと判断した。